慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジョルジュ・バタイユの文学論の思想史的意義と現代的射程
Sub Title	The historical significance of Georges Bataille's theory of literature and its contemporary importance
Author	石川, 学(Ishikawa, Manabu)
Publisher	慶應義塾大学
Publication year	2022
Jtitle	学事振興資金研究成果実績報告書 (2020.)
JaLC DOI	
Abstract	本研究の内容は、ジョルジュ・バタイユと、モーリス・ブランショならびにジャン＝リュック・ナンシーという、思想的連関がしばしば強調されながらも、個々のスケールの巨大さゆえに、その具体的検証がいまだ途上にある思想家たちの文学をめぐる思索を比較対照し、その交差と相違を浮かび上がらせることである。二年計画の二年目である2020年度は、前年度に目処をつけた、ブランショ『『ジュルナル・デ・デバ』誌の文学時評 1941.4 - 1944.8』の翻訳について、複数の共訳者と訳稿の読み合わせを重ね、自他の訳文の精錬と註の充実に注力した。本訳書は、2021年中の刊行に向けて、詰めの作業が進められている。この仕事と並行しながら、前年度の研究成果を引き継いで、バタイユ『文学と悪』（1957年）のカフカ論における、ブランショ「カフカを読むこと」（1945年）「文学と死への権利」（1947-48年）からの本質的影響をより深く検討する作業を行うとともに、これら二人の思想家の「文学」「書くこと」「読むこと」といった主題を、ナンシーの文学理解を介して捉え直す試みを実施した。この成果は、2017年にナンシーを慶應義塾大学に招いて開催された国際シンポジウム「神話・共同体・虚構――ジョルジュ・バタイユからジャン＝リュック・ナンシーへ」における拙発表を発展させるかたちで、2020年度内に論文として公刊された。同論文にはナンシーによるコメントの日本語訳も付されており、現在時のナンシー思想の開示という観点からも少なからず意義を持つものと考えている。Covid-19の世界的蔓延による渡航制限のために、フランスでの資料収集・資料調査を断念せざるを得なかったことが遺憾だが、こうした状況下において、有益な研究進捗ができたものと判断している。 I have refined the translation of Maurice Blanchot's "Chroniques littéraires du 'Journal des débats' Avril 1941 - Août 1944" through readings with co-translators. I have published a paper on Bataille's theory of literature and Jean-Luc Nancy's comments on this paper.
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=2020000008-20200182

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2020 年度　学事振興資金（個人研究）研究成果実績報告書

2022 年 11 月 30 日

研究代表者	所属	商学部	職名	専任講師	補助額	300 （A） 千円
	氏名	石川 学	氏名（英語）	ISHIKAWA, MANABU		

研究課題（日本語）

ジョルジュ・バタイユの文学論の思想史的意義と現代的射程

研究課題（英訳）

The historical significance of Georges Bataille's theory of literature and its contemporary importance

１．研究成果実績の概要

本研究の内容は、ジョルジュ・バタイユと、モーリス・ブランショならびにジャン＝リュック・ナンシーという、思想的連関がしばしば強調されながらも、個々のスケールの巨大さゆえに、その具体的検証がいまだ途上にある思想家たちの文学をめぐる思索を比較対照し、その交差と相違を浮かび上がらせることである。二年計画の二年目である 2020 年度は、前年度に目処をつけた、ブランショ『『ジュルナル・デ・デバ』誌の文学時評　1941.4 – 1944.8』の翻訳について、複数の共訳者と訳稿の読み合わせを重ね、自他の訳文の精錬と註の充実に注力した。本訳書は、2021 年中の刊行に向けて、詰めの作業が進められている。この仕事と並行しながら、前年度の研究成果を引き継いで、バタイユ『文学と悪』（1957 年）のカフカ論における、ブランショ「カフカを読むこと」（1945 年）「文学と死への権利」（1947-48 年）からの本質的影響をより深く検討する作業を行うとともに、これら二人の思想家の「文学」「書くこと」「読むこと」といった主題を、ナンシーの文学理解を介して捉え直す試みを実施した。この成果は、2017 年にナンシーを慶應義塾大学に招いて開催された国際シンポジウム「神話・共同体・虚構――ジョルジュ・バタイユからジャン＝リュック・ナンシーへ」における拙発表を発展させるかたちで、2020 年度内に論文として公刊された。同論文にはナンシーによるコメントの日本語訳も付されており、現在時のナンシー思想の開示という観点からも少なからず意義を持つものと考えている。Covid-19 の世界的蔓延による渡航制限のために、フランスでの資料収集・資料調査を断念せざるを得なかったことが遺憾だが、こうした状況下において、有益な研究進捗ができたものと判断している。

２．研究成果実績の概要（英訳）

I have refined the translation of Maurice Blanchot's "Chroniques littéraires du 'Journal des débats' Avril 1941 – Août 1944" through readings with co-translators. I have published a paper on Bataille's theory of literature and Jean-Luc Nancy's comments on this paper.

３．本研究課題に関する発表

発表者氏名（著者・講演者）	発表課題名（著書名・演題）	発表学術誌名（著書発行所・講演学会）	学術誌発行年月（著書発行年月・講演年月）
石川学	神話の不在、文学の不在：ジョルジュ・バタイユと消滅の力をめぐって	多様体第 2 号	2020 年 10 月